

【表現学関連分野の研究動向】

国語教育

佐藤 多佳子

2023年の国語教育研究の動向として、多くの大学で教育学研究科修士課程から教職大学院への移行が急速に進んだという背景から、教育実践を照射した研究が増えていることが挙げられる。全国大学国語教育学会編『国語科教育』第九十三集では、秋季大会(第143回千葉大会)のシンポジウム「新しい実践学としての国語教育学を探る—教職大学院における国語教育研究のあり方—」、『国語科教育』第九十四集では、春期大会(第144回島根大会)のシンポジウム「授業場面における国語科教科内容の生成」の報告がなされている。実践学としての国語教育学・国語教育研究への探究があると同時に、コンピテンシー・ベースの時代における国語科教科内容論や国語教育研究の枠組みの捉え直しの議論がなされている。『国語科教育』第九十三集では、久田義純「中学校国語科授業における「語り」概念習得のための指導方法の開発—日記創作の活用と「ごんぎつね」の語りに着目した実践から—」が実践論文として掲載され、文学教育においてナラトロジーを視点とした実践や研究に関心が寄せられていることがわかる。『国語科教育』第九十四集では、木村季美子・上田楓・明尾香澄「アーノルド・ローベル「おてがみ」の「名づけ得ない関係性」を読む—教材可能性を開くクィアの思弁的なプロセス—」が研究論文として掲載され、クィアを視座として固定的な枠組みを前提とした教室の読みの営みにおいて見逃されていた教材可能性を提示している。

日本国語教育学会編『月刊国語教育研究』では、2023年4月No.612で「「学びたい」に応える国語単元学習」という特集が編まれた。特集論文の小林一貴「プレ・ジャンルから「教えること」を考える」では、プレ・ジャンルの概念をふまえ、ワークショップ形式の書くことの授業における対話的な活動の「複相状態」に着目し、教える側の「相互行為のプロセスの参加者としての振る舞い」の重要性に言及している。同号の研究論文、西一夫「川辺の景と情—『伊勢物語』「東下り」教材化への視点」において、「東下り」の八橋の場面に描かれる景物や表現の工夫などを教材として扱う視点から分析を試みている。また、同誌2023年12月No.620では、生成AIへの注目やGIGAスクール構想による一人一台の情報端末の使用に鑑みて「国語単元学習と情報端末の活用」を特集している。特集論文として、大井和彦「生活における情報端末環境から考える国語科学習—話すこと・書くことと情報のとらえ方から—」では、「情報端末は処理の道具ではなく、思考と表現を促す学びの道具」であるとして「個別最適」なものを選ぶ大切さを指摘している。同特集論文、羽田潤「マルチモーダル・リテラシー育成を目指した国語科単元学習」では、タブレットの導入によって動画の教材化の可能性が広がったことを受け、マルチモーダル・リテラシー(複数のモードによって構成される生成物を対象とした、読解力や表現力、活用する力)の育成を目標とした学習の効果に言及している。

(上越教育大学)